

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：34310  
 研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）  
 研究期間：2017～2020  
 課題番号：16KK0043  
 研究課題名（和文）スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）A Study on Linkage between Scholarly Activities of 'Ashab al-Hadith' and Formation of the Sunnis  
 (Fostering Joint International Research)

研究代表者  
 森山 央朗 (MORIYAMA, Teruaki)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：60707165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,100,000円  
 渡航期間： 9ヶ月

研究成果の概要（和文）：イスラームの多数宗派であるスンナ派は、社会がハディース（預言者ムハンマドの言行に関する伝承）を典拠とする預言者のスンナ（慣行）に立脚すると主張し、11世紀頃の西アジアで確立された。本研究は、スンナ派の形成・浸透の歴史的過程の解明に向けて、10～13世紀の西アジアにおいて「ハディースの徒」と自称したウラマー（イスラーム宗教知識人）に焦点を当て、国際共同研究によって、彼らの知的実践を研究した。その結果、「ハディースの徒」は、ハディースをめぐる知的実践を通してハディースの真正性を評価する理論と方法を発達させ、その理論と方法を柔軟に活用して、社会の様々な事柄をスンナに結びつけたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
 スンナ派とシーア派というイスラームの二大宗派は、預言者ムハンマドの死（632年）から11世紀頃にかけての長い歴史の変容の中で徐々に形成された。スンナの典拠としてのハディースの重要性を主張した「ハディースの徒」の知的実践に関する社会史的研究を国際的環境で遂行した本研究は、スンナ派形成史の解明に向けた世界的な議論に寄与し、宗派をめぐる現代的諸問題を解決するための知的基盤の形成に貢献した。

研究成果の概要（英文）：The Sunni sect, the majority of the current Muslim population, argues that the Muslim community should be based on the Prophetic Sunna (custom) authorized by Hadiths attributed to the Prophet Muhammad (d. 632). The establishment of the sect gradually progressed from the 7th to 11th century. This research project focused on Ulama who called themselves "Ashab/Ahl al-Hadith" or "people of the tradition" in West Asian Muslim society between the 10th and 13th centuries. This international research project examined scholarly practices through which the Ashab al-Hadith established their theories and methodology concerning Hadiths, especially demonstration of the authenticity of Hadiths, as well as how they used their theories of the Hadith studies for attributing various matters found in the society to the Prophetic Sunna by using their knowledge of Hadith. Through the examination, the research project discussed the contribution of their scholarly practices to the formation of Sunnis.

研究分野：初期・古典期イスラーム史

キーワード：ハディース ハディースの徒 スンナ派 ウラマー 社会史 西アジア

## 1. 研究開始当初の背景

本国際共同研究の基課題は、「ハディースの徒」の社会史的研究：スンナ派の形成・浸透過程の解明に向けて」(基盤研究C：26370840)である。この基課題の背景には、イスラーム地域の紛争は、しばしばスンナ派とシーア派の宗派対立と本質論的に語られるが、宗派は歴史的に形成され、社会状況に応じて変化するものであり、宗派を理解するためには、思想だけでなく、それを支える知的実践の形成と変容を、社会の変化と関連づけて歴史的に論究するべきであるという認識があった。この認識を背景とした基課題の目的は、ハディースをめぐる知識体系であるハディース学の10世紀から13世紀にかけての西アジアにおける展開と、それを担ったウラマー(イスラーム宗教知識人)なかでも「ハディースの徒(Ashab/Ahl al-Hadith)」と自称したハディース学者の知的実践を社会史的に解明することであった。

ハディースとは、預言者ムハンマド(632年没)の言行に関する伝承であり、現在のイスラームの多数宗派であるスンナ派は、ハディースを主要な典拠とする預言者の慣行(スンナ)の遵守を理想とする。スンナ派は、預言者死後のウンマ(イスラーム共同体)の指導権をめぐる政治的闘争と、イスラームをめぐる宗教的・思想的論争を経て、11世紀頃の西アジアで確立された。したがって、11世紀を挟んで、10世紀から13世紀にかけて(古典イスラーム期)の西アジアのムスリム(イスラーム教徒)社会において、ハディースをめぐるどのような議論と知的実践が行われ、それらの議論と知的実践が、ハディースとスンナの権威をどのように社会に浸透させていったのかを研究することは、スンナ派の形成と浸透の歴史的過程を解明する上で不可欠である。自分たちのウンマがスンナに則っているという実感は、社会に存在する様々な事柄をスンナに依拠して価値づけることで得られ、その価値付けの正当性は、依拠したスンナの典拠となるハディースの真正性の証明に依拠するところが大きいからである。

古典イスラーム期におけるハディース学とハディース学者に関する近年の研究は、モツキー Harald Motzki、ルーカス Scott Lucas、ブラウン Jonathan A.C. Brownといった研究者によって牽引され、2000年代から欧米のイスラーム思想・歴史研究で関心を集めてきた。また言うまでもなく、ハディースと古典ハディース学は現代のウラマーにとっても重要である。19世紀後半から20世紀前半に、ハディースが近代的・実証主義的文献学の研究対象となって以来、欧米の研究者とウラマーの間で、ハディースに語られる預言者ムハンマドの言行の史実性をめぐる建設的とは言えない論争が続き、ハディースをめぐる研究は停滞気味であった。2000年代以降の研究の進展は、ハディースを7世紀の預言者時代の史料として論じるのではなく、1400年におよぶイスラームの歴史と、世界各地に広がるムスリムの諸社会のなかで、様々な利用されてきたもの、すなわち、イスラームの思想やムスリムの文化の多様性を反映するものとして論究するようになった転換を背景としている。本国際共同研究および基課題も、ハディースをめぐる研究のそうした世界的転換を背景とする。

## 2. 研究の目的

本国際共同研究の目的は、上記の基課題の総括作業を国際共同研究として行うことであった。その理由は、基課題の研究テーマであるハディースや「ハディースの徒」に関して、日本にはほとんど研究蓄積がないため、(1)国際的な研究環境の中で十分な批評に晒すことで、研究成果の水準を高める必要があったことと、(2)ムスリム(イスラーム教徒)の研究者との建設的な議論をとおして、「オリエンタリズム」的な研究になることを防ぐことが必要だったからである。

基課題は、10世紀から13世紀の西アジア・ムスリム社会における「ハディースの徒」の知的実践を社会史的に分析し、スンナ派の形成過程を明らかにするという研究目的の達成に向けて、以下の3つの課題を設定した。すなわち、【課題1：「ハディースの徒」時代的・地理的分布の傾向の整理】、【課題2：ハディース真正性判定理論の形成・展開の解明】、【課題3：「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】の3つである。基課題は、2014年度から続けられており、2017年度に本国際共同研究を開始するまでに、【課題1】、【課題2】に関する研究作業をほぼ完了し、以下の成果を得ていた。

【課題1】に関する研究成果としては、8世紀以来、イスラーム世界のほぼ全域で、様々なウラマーが「ハディースの徒」を名乗って、多様な主張と活動を展開してきたことを確認した。その一方で、「ハディースの徒」の主流は、シャーフイー法学派を支持するハディース学者たちであり、中でも、10世紀前半のホラーサーン(イラン北東部)に遡る学統に連なって、10世紀後半から13世紀前半にかけて、ホラーサーンからイラク、シリアに至る地域で活躍した「ハディースの徒」が、ハディースをめぐる知識体系(ハディース学)の発展に重要な役割を果たしたことを明らかにした。【課題2】に関しては、ホラーサーン系シャーフイー派「ハディースの徒」が著したハディース学理論書を分析し、10世紀後半から11世紀前半のホラーサーンで、ハディースの真正性を判定・証明するための様々な方法と理論が提唱され、それらの方法・理論が利用と議論を経て洗練されつつイラクやシリアへも伝播し、12世紀後半から13世紀前半にかけて、ハディース学の古典理論に結実していく過程を跡づけた。

本国際共同研究は、基課題の研究作業として【課題 3】に関する分析の成果を得つつ、上述の基課題の 3 つの課題に関する研究作業の成果を、ハディース学を研究する海外の研究者との継続的な意見交換をとおして総合的に検討し、「ハディースの徒」の知的実践の社会史的な分析からスンナ派の形成・浸透の歴史的過程を考察する基課題全体の研究成果を、国際的な研究水準に照らしてより高度なものとすることを目的とした。また、ハディースは、イスラームの信仰の根幹に関わるものであるため、現在のムスリムがどのようにハディース学の伝統を継承しているのかを完全に無視して、ムスリムが極めて少ない日本においてのみ研究し、その成果を日本においてのみ発表することは、他者の宗教の歴史を、その外部において一方的に語るという「オリエンタリズム」的な状況に陥る危険が付きまとう。したがって、ムスリムが多数派を占める国において、イスラームの信仰を持ってハディースを研究している研究者との議論を通して、基課題の研究が「オリエンタリズム」的な研究となることを防ぐことも、本国際共同研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

以上の研究目的の達成に向けて、本国際共同研究は、アメリカ合衆国ワシントン DC のジョージタウン大学外交学院アルワリード・ビン・タラール王子ムスリム-キリスト教徒理解センター (ACMCU: Prince Alwaleed bin Talal Center for Muslim-Christian Understanding, School of Foreign Service, Georgetown University) および、トルコ共和国イスタンブールのイブン・ハルドゥーン大学諸文明協調研究所 (MEDIET: Medeniyetler İttifakı Enstitüsü, İbn Haldun Üniversitesi/Alliance of Civilizations Institute, Ibn Haldun University) における在外研究を中心に遂行した。ACMCU における海外共同研究者は、センター長であったブラウン Jonathan A.C. Brown 准教授 (2020 年に教授に昇任) であり、MEDIET における海外共同研究者は、学長兼センター長であったシェンチュルク Recep Şentürk 教授であった。ブラウン准教授は、研究開始当初の背景の欄で述べたとおり、欧米におけるハディース学研究を牽引する研究者の一人であり、現在のスンナ派にとって最も権威の高いハディース集であるブハーリー (870 年没) とムスリム (875 年没) の『正伝集』が、10 世紀から 13 世紀にかけて権威化されていった理論的過程を論じた単著、*The Canonization of al-Bukhari and Muslim* (Leiden: Brill, 2007) によって、若手の頃から世界的に注目を集めてきた。他方、シェンチュルク教授は、ウラマーの伝統を引くハディース学に深い造詣を持つとともに、コロンビア大学 (アメリカ合衆国、ニューヨーク市) で社会学を修め、*Narrative Social Structure: Hadith Transmission Network 610-1505* (Stanford: Stanford University Press, 2005) などの研究を発表してきた。ウラマーの伝統と近代社会学の双方に通じたシェンチュルク教授との共同研究は、基課題の研究を「オリエンタリズム」的なものなることを防ぐという、本国際共同研究の目的の達成に極めて有効であった。

具体的な研究方法・作業の進展については、以下に年度ごとにまとめる。

#### 【2017 年度】

基課題の【課題 3】に関する作業を進めつつ、在外研究の準備を進めた。その一環として、12 月に他の研究事業の招聘によって訪日したブラウン准教授を招き、基課題の研究事業として同志社大学において国際研究集会、*Utilizing the Prophetic Legacy: Questions of Justice and Authority in the Muslim Societies* を開催した。

#### 【2018 年度】

4 月から 12 月にかけて、ACMCU に客員研究員 (Visiting Researcher) として滞在し、在外研究を行った。ブラウン准教授との共同研究においては、継続的な意見交換と文献・史料の精読・読み合わせを行うという堅実な方法を採用した。加えて、ブラウン准教授の指導下の大学院生や ACMCU に関係する研究者たちと意見交換を行い、欧米におけるハディース研究の最新の知見や研究動向に関する情報を収集した。また、基課題と本国際共同研究の成果を発信し批評を仰ぐために、ACMCU において 11 月 4 日・5 日の 2 日間にわたってブラウン准教授と共同で国際研究集会、*The Hadith in Islamic Thought and Practice* を開催し、研究代表者とブラウン准教授がそれぞれの研究成果を発表した。この研究集会には、研究代表者とブラウン准教授に加えて、イスタンブール大学神学部 (Faculty of Theology, Istanbul University) からネジメッティン Necmettin Kızılkaya 准教授とヨルルマズ Nilüfer Kalkan Yorulmaz 研究員 (Research Associate) を、イリノイ大学人文科学学部 (College of Liberal Arts and Sciences, Illinois University) からダン Michael H. Dann 助教を、MEDIET から山本直輝助教を招待し、彼らの研究発表も合わせて、ハディース研究に関する意見交換を行った。

以上の主要な研究作業の他に、ハヴァード大学とシカゴ大学でアラビア語写本史料と関連研究文献を調査・収集し、中東研究学会 (Middle East Studies Association) の年次大会 (11 月 15~18 日、アメリカ合衆国テキサス州サンアントニオ市) に参加して研究情報の交換・収集を行った。

以上の ACMCU における共同研究を 12 月に終え、一時帰国した。帰国中は、ACMCU での共同研究で得た知見を整理するとともに、次の MEDIET における共同研究の準備を行った。なお、申請

段階では、ACMCUでの共同研究の後、テヘラン大学イスラーム神学部(Daneshkade-ye Elahiyat ve Ma'aref-e Eslami, Daneshgah-e Tehran/Faculty of Theology and Islamic Studies, University of Tehran, イラン・イスラーム共和国テヘラン市)においてマアレーフ Majid Ma'aref 准教授と共同研究を行う予定であったが、ACMCUでの共同研究を通じて、主にイラン国内で研究を行ってきたマアレーフ准教授よりも、上述のとおり、ウラマーの伝統と近代社会学の双方に通暁したシェンチュルク教授と MEDIET において共同研究を行うことの方が、本国際共同研究の目的にとってより有効であることが明らかとなり、シェンチュルク教授からの受入の承認を得た後、渡航先海外機関の変更を申請して認められた。

それを受けて、2021年1月から3月にかけて MEDIET に客員研究員(Visiting Researcher)として滞り、シェンチュルク教授と意見交換を行うとともに、MEDIET に関係するトルコ内外の研究者たちと継続的に交流し、本国際共同研究および基課題の研究手法と成果が、ムスリムとしてハディースなどを研究する視点から見ても、一定の妥当性と有効性を持つことを確認した。また、2月13日に MEDIET が開催した公開講演会、*Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges* において、シェンチュルク教授と並んで登壇し、本国際共同研究および基課題の研究成果を基に研究発表を行い、聴衆と質疑を交わした。

#### 【2019年度】

本国際共同研究は、申請段階では2018年度の在外研究を以て完了する予定であったが、2018年度の在外研究で得た知見や批評を活用して本研究と本研究の基課題の研究成果をより精緻なものとし、その成果を内外の研究者と共有することを目指した研究作業を主に国内で行うために2年間の延長を申請し、認められた。資金としては、当初の計画で、2018年度の在外研究中に、在外研究先を起点として史料調査や学会参加のための出張を行うために見込んでいた費用に発生した余剰を中心に充当した。余剰が出た理由は、ACMCU 滞在中に、欧州やトルコへの出張を予定していたが、研究代表者はシリアやイランへの研究目的の渡航歴があったため、米国が国境管理の厳格化(特に中東諸国出身者および渡航歴のある者に対する)を進めていた折りに出国することは、再入国を拒否される懸念が生じたため、予定の出張を断念せざるを得なかったためである。加えて、研究代表者の所属研究機関である同志社大学の規定では、在外研究の滞在費と在外研究先を離れての出張費を重複して支出できないことが判明し、米国内の研究出張で執行された経費も限定的なものとなった。

延長期間における研究作業の目的は、(1)2018年度の在外研究で構築した米国及びトルコの研究者とのネットワークを活用し、本研究と基課題の研究目的をより精緻に達成することであり、(2)2018年度に ACMUC で開催した国際研究集会の成果を、学術雑誌上の英文特集として公開する作業を国内から進めることとであった。2019年度は、主に(1)の目的に向けた研究作業を行い、在外研究の成果を内外の研究者と共有し、本国際共同研究および基課題の研究成果への批評を仰ぐために、国内で開催された学会で英語・日本語で研究発表を行った。また、国際的な共同研究も継続して行った。2018年度の在外研究先の1つであった MEDIET を8月に再訪し、12月にはブラウン准教授と山本助教を招聘して共同で史料の検討・意見交換を行うなど、在外研究のフォローアップを行った。

#### 【2020年度】

上記の(2)の目的に向けた研究作業を中心に行い、2018年度に ACMCU で開催した国際研究集会に発表者から、研究代表者、ブラウン准教授、山本助教、ヨルルマズ研究員の論考を集めた特集、「Hadith in Islamic Thoughts and Practices」として、Annals of Japan Association for Middle East Studies(『日本中東学会年報』)に投稿し、査読を経て掲載された。また、基課題および本国際共同研究の遂行を通して構築した、古典イスラーム期において「ハディースの徒」と称した/称されたウラマーたちの経歴情報、および、彼らの著作情報に関するアラビア語のデータベースを、基課題の研究成果公開の一環として、日本語とアラビア語で立ち上げたウェブサイトに、アラビア語による検索機能を実装して公開した。

## 4. 研究成果

研究の目的で述べたとおり、本国際共同研究は、基課題で設定した三つの分析課題に関する研究成果の総括を、在外研究を中心とした国際的な議論・検証を通して行うこととであった。三つの分析課題のうち二つ、すなわち、【課題1:「ハディースの徒」時代的・地理的分布の傾向の整理】、【課題2:ハディース真正性判定理論の形成・展開の解明】については、本国際共同研究の開始前に研究作業をほぼ完了し、その成果として、10世紀から13世紀にかけて、形成・拡散したホラーサーン系シャーフィー派「ハディースの徒」の学統が、スンナ派ハディース学の主流を形成した事を明らかにしていた。

2017年度に、本国際共同研究による在外研究の準備を進めつつ、基課題の研究作業として継続した【課題3:「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】に関する研究から、以下の2点が明らかになった。すなわち、(1)11世紀から12世紀に、ホラーサーンからシリアにかけての各地で活動した「ハディースの徒」は、10世紀後半のホラーサーンで提起されたハディース真正性判定理論を柔軟に活用し、社会や政治が要請する様々な事柄をスンナに根

拠付けてイスラーム的な価値を保証する著作を数多く執筆し、それらの著作はハディース学者の知的実践の中で評価されると同時に、社会的にも広く受容されたと考えられること。(2)しかし同時に、「ハディースの徒」は、彼らの権威の源泉であるハディースの真正性の価値を維持するために、真正性判定理論を厳格化せざるを得ず、そのことが、13世紀後半にかけて「ハディースの徒」の活動を停滞させていったことである。

2018年度は、既に述べたとおり、在外研究における海外の研究者との共同研究を通して、【課題1】【課題2】【課題3】の各成果について、批評を仰ぎ、それらの批評を盛り込んで各課題の成果を総合的に考察し、研究全体を総括した。この総括作業によって、以下の3点を解明した。すなわち、(1)「ハディースの徒」を称したウラマーたちは、知識人としての評価を得るために行った知的実践の成果を用いて、周囲の社会的・政治的要請にも良く応えていたこと。(2)そうした社会や政治に対する協力的な姿勢が、彼らの社会的権威にもつながっていたこと。そして、(3)社会や政治の多くの側面を、ハディースをとおしてスンナに結びつけようとする彼らの姿勢と活動が、スンナに則った共同体の一員と自らを想像する人々、すなわち、スンナ派の形成に大きく貢献したと考えられることである。これらの研究成果は、本研究の計画段階で予測されていた成果にほぼ沿ったものであり、本研究はその全体を通して計画通りに遂行され、スンナ派の形成と浸透の歴史過程の解明に寄与したと評価される。以上の研究成果に基づき、2018年11月にACMCUで開催した国際研究集会で“Scholarly Practice of the Medieval Ashab al-Hadith and Their Social Authority”と題する研究発表を行い、2019年2月のMEDIETの公開講演会では、“Scholarly Practice of Khurasani Ashab al-Hadith and Spread of the Prophetic Sunna in the Medieval Muslim Society”という標題で発表した。

2019年度は、国内で第6回国際マムルーク会議(6月15～17日、早稲田大学)において、“From Khurasani Ashab al-Hadith to Mamluk Shafi'i School: Succession to the Classical Hadith Studies”というタイトルで研究発表を行い、東洋史研究大会(11月4日、京都大学)においても「ホラーサーン系「ハディースの徒」の著述活動：10～13世紀のハディース列挙型論説の盛衰」と題する研究発表を行った。これらの研究発表は、本国際共同研究・基課題の研究成果の公開の一部をなすものである。また、ブラウン准教授と山本助教の招聘に際しては、*Slavery and Hadith*(12月23日、早稲田大学)、*Hadith and Sahaba*(12月26日、同志社大学)という2件の国際研究集会を開催した。これらの国際研究集会における研究発表と議論は、本国際共同研究の成果をより精緻なものとするとともに、研究成果を国内の研究者、大学院生などと共有することに貢献した。

2018年11月にACMCUで開催した国際研究成果を学術雑誌の英文特集として公開する作業は、上欄「研究方法」に記したとおり、2020年度に達成された。この特集における研究代表者の論考、“Using Hadiths in the Appropriate Style: Scholarly Practice of the Shafi'i Ashab al-Hadith”は、本国際共同研究と基課題の研究成果に基づくものである。また、基課題によって解説したウェブサイトにも、「ハディースの徒」の経歴・著作などをしたアラビア語のデータベースをサイト上での検索機能を実装して公開した。このデータベースは、本国際共同研究と基課題の研究作業を通して構築されたものであり、ハディース学の歴史的展開を研究するための知的基盤となることが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 MORIYAMA Teruaki	4. 巻 36-2
2. 論文標題 Special Feature: Hadith in Islamic Thoughts and Practices: Introductory Essay	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Annals of Japan Association for Middle East Studies	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MORIYAMA Teruaki	4. 巻 36-2
2. 論文標題 Using Hadiths in the Appropriate Style: Scholarly Practice of the Shafi'i Ashab al-Hadith (Special Feature: Hadith in Islamic Thoughts and Practices)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Annals of Japan Association for Middle East Studies	6. 最初と最後の頁 5-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山央朗	4. 巻 63-2
2. 論文標題 書評 小杉泰編訳『ムハンマドのことば：ハディース』岩波文庫2019年11月	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 オリエント	6. 最初と最後の頁 215-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川修一，辻学，森山央朗，馬場紀寿，矢田尚子，久保田浩	4. 巻 31
2. 論文標題 公開シンポジウム 「聖人」のことば：先入観を超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 73-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 MORIYAMA Teruaki
2. 発表標題 From Khurasani Ashab al-Hadith to Mamluk Shafi' i School: Succession to the Classical Hadith Studies
3. 学会等名 Sixth Conference of the School of Mamluk Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森山央朗
2. 発表標題 ホラーサーン系「ハディースの徒」の著述活動：10-13世紀のハディース列挙型論説の盛衰
3. 学会等名 2019年度東洋史研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森山央朗
2. 発表標題 預言者ムハンマドのことばをめぐる知識体系
3. 学会等名 「聖人」のことば：先入観を超えて
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Teruaki Moriyama
2. 発表標題 Scholarly Practice of the Medieval Ashab al-Hadith and Their Social Authority
3. 学会等名 The Hadith in Islamic Thought and Practice (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Moriyama Teruaki
2. 発表標題 Scholarly Practice of Khurasani Ashab al-Hadith and Spread of the Prophetic Sunna in the Medieval Muslim Society
3. 学会等名 Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

森山央朗研究室：10～13世紀の西アジアにおけるハディース学とハディース学者に関する社会史的研究  
<http://mktb-moriyamat.jp>  
 上記URLは、基課題の研究成果公開の一環として、日本語とアラビア語で構築したウェブサイトである。本研究では、このウェブサイトにて、「ハディースの徒」と自称したウラマーたちの経歴・著作を整理したアラビア語データベースを実装・公開した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ブラウン ジョナサン  (Brown Jonathan A.C)	ジョージタウン大学・外交学院ACMCU；アルワリード・ビン・タラール王子ムスリム・キリスト教徒理解センター・准教授兼センター長	



## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	レジェプ シェンチュルク  (Senturk Recep)	イブン・ハルドゥーン大学・諸文明協調研究所・教授兼学長	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	カルカン・ヨルルマズ ニリュフェル  (Kalkan Yorulmaz Nilufer)	イスタンブル大学・神学部・研究員	
その他の研究協力者	ネジメットィン クズルカヤ  (Kizilkaya Necmettin)	イスタンブル大学・神学部・准教授	
その他の研究協力者	ダン マイケル  (Dann Michael H.)	イリノイ大学・人文科学学部・助教	
その他の研究協力者	山本 直輝  (YAMAMOTO Naoki)	イブン・ハルドゥーン大学・諸文明協調研究所・助教	
その他の研究協力者	木村 風雅  (KIMURA Fuga)	東京大学大学院・人文社会系研究科・大学院生（博士課程）	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Hadith and Sahaba, Doshisha University, December 26, 2019.	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Slavery and Hadith, Waseda University, December 23, 2019	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 The Hadith in Islamic Thought and Practice, ACMCU Georgetown University, November 4-5, 2018	開催年 2018年～2018年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ジョージタウン大学外交学院 ACMCU			
トルコ	イブン・ハルドゥーン大学諸文 明協調研究所			